

報社会、管理社会などと名付けられながら変化している。かような動きある社会という地平に対比させつつ、家庭の「基本構造」を新しい視点——それをもし生活学的な立場ともいい得るか——から一つの仮説前提として探索することを試みた。

2. われわれはかかる意味において、家庭生活をその日常性のなかに捉え、そこに現われている限りにおいての生活現象をありのままに記述し、それを構造主義的な方法に依りつつ、その基本構造が如何にあるかにアプローチし、次いでその全体「構造」が如何なるものであるかの解明への途を志ざしている。

3. まず第1に、家庭生活の基本的構造を日常生活のなかに図式化し、ついでエネルギーの代謝構造を明らかにするとともに、人間の存在の諸様相をも捉え、それを可能ならしめる諸条件、ならびに生活手段、方法としての諸様式(生活文化)を明確にせんと試みた。特にそれらに用いられる、学的認識を基礎とし、生活技術的な面をも考慮しつつ、生活過程の分析の全体的把握に、肉迫しようとした。

F-13 家庭生活の基本構造についての一考察

東京文化短大 松岡 明子

1. われわれの家庭生活は、それをとりまく、めまぐるしい変動をともなっている社会のなかに、それとともに流動している。かつその社会は、現代社会として捉えられ、工業社会(技術社会)から脱工業社会、あるいは情